

実践報告

多職種連携教育の中の初年次教育

紀平知樹、常見幸

兵庫医療大学共通教育センター

First Year Experience in the Interprofessional Education

Tomoki KIHIRA, Sachi TSUNEMI

General Education Center, Hyogo University of Health Sciences

抄 録

2016年度兵庫医療大学FD/SDワークショップにおける実践報告として、共通教育センター教員が中心となって開講している初年次教育科目アカデミックリテラシーの授業実践についての報告を行った。本学は薬剤師、看護師、理学療法士、作業療法士の育成を目指す医療総合大学であり、共通教育センターはチーム医療教育を担う部署でもある。そこで初年次教育においても、チーム医療教育、あるいは多職種連携教育を見据えたカリキュラム作りが必要である。本報告では、2016年度の前期に行われたアカデミックリテラシーの授業内容と今後の課題について報告する。

キーワード：初年次教育、多職種連携教育、スタディスキル、情報リテラシー

I はじめに

共通教育センターは本学の初年次教育、一般教育科目、語学、チーム医療関連科目などを担う部署であり、本学の教育目標に掲げられている「ボーダレスな教育環境」や「チーム医療教育」を推進している。本稿で紹介するアカデミックリテラシーは初年次教育科目として、以前に開講されていたいくつかの科目を統廃合しつつ、さらにチーム医療教育の基盤作りを目標として薬学部、看護学部、リハビリテーション学部の教員や事務員の協力も得ながら2013年度より開講している。各年度とも各学部からは延べ人数で60名もの教員にこの授業に参加していただいている。開講当初より、教育目標、到達目標は大きく変えてはいないが、

実際の授業運営については様々な試行錯誤を行いながら、実施している。本報告では2016年度に行ったアカデミックリテラシーの実施について報告を行う。

II 医療教育におけるIPEの要請

厚生労働省のチーム医療の推進に関する検討会の報告書（『チーム医療の推進について』、厚生労働省、2010）では、チーム医療とは「医療に従事する多種多様な医療スタッフが、各々の高い専門性を前提に、目的と情報を共有し、業務を分担しつつも互いに連携・補完し合い、患者の状況に的確に対応した医療を提供すること」といわれている。こうした医療が要請される背景としては、患者や家族からの安心・安全な医療

を求める声が高まってきていることと、医療の高度化、複雑化による業務の増大ということが挙げられる。近年は、こうしたチーム医療という考え方とともに徐々に多職種連携（Interprofessional Work : IPW）や Interprofessional Collaboration という呼称も普及しつつある。本学は「優れたコミュニケーション能力を基礎とした、チーム医療・地域医療を担える資質の育成」を教育目標のひとつとして掲げており、専門課程の医療・医学そのものについての科目だけでなく、基礎的な教育の段階から、コミュニケーション能力の涵養と、チーム医療の基盤となるコンピテンシーの養成や専門領域を超えた学びの場を提供すべきであると考えている。

ここではWHOが出している *Framework for Action on Interprofessional Education & Collaborative Practice* によって、連携医療と多職種連携教育（IPE）の定義をしておく。連携医療とは「異なる専門分野の複数の医療従事者が患者、家族、介護者、コミュニティと連携して最高品質のケアを提供すること」（WHO2010, 7）であると定義される。そしてIPEとは「効果的な連携を実現し、健康アウトカムを改善するために複数の専門分野の学生が互いに学習し合うこと」（WHO2010, 7）である。そしてWHOのFrameworkでは、以下の6つの学習目標が掲げられている。(1) チームワーク、(2) 役割と責任、(3) コミュニケーション、(4) 学習と批判的考察、(5) 患者との関係、および患者のニーズの把握、(6) 倫理的実践。このすべてについて初年次教育でカバーすることは困難であるが、(1) から (4) の項目については、チーム医療教育を掲げる本学の初年次教育としては、含めるべき教育内容であると考えている。

初年次教育に求められるリテラシーやスタディスキルズと上にあげたIPEでの学習目標となるようなコンピテンシーの涵養を見据えながら、このアカデミックリテラシーでは、教育目標、到達目標として以下のような項目を掲げている。

Ⅲ 教育目標と到達目標

本授業科目の教育目標は以下の通りである。

- (1) 将来の医療人としての勉学への動機づけを行う
- (2) 将来の医療人として必要なコミュニケーションやマナーを理解する
- (3) 情報検索の方法を理解する
- (4) 作文とレポートの違いを理解する

- (5) 情報機器による情報伝達手段、表現手法の基礎を身につける
- (6) 情報機器やインターネットのマナーについて理解し、適切な使用法を習得する
- (7) 他者との議論を通じた問題探求の手法を習得する

また、到達目標としては以下の項目を掲げている。

- (1) 自学自習の態度を確立できる
- (2) 自学自習に役立つノートテイキングができる
- (3) 日頃から医療人にふさわしい振る舞いを心がける
- (4) 情報検索の方法について説明できる
- (5) ソフトウェアを用いて自らの考えを表現できる
- (6) 情報の真偽について吟味できる
- (7) 学術的なレポートを作成できる
- (8) 他者と積極的に対話を行える

Ⅳ 授業の実施形態

この授業は、薬学部、看護学部、リハビリテーション学部（理学療法学科、作業療法学科）の3学部の新入生361人（2016年度の場合）を対象とした必修の授業である。従来は金曜日の午後3、4限連続で15週にわたり授業を行っていたが、スタディスキルズなど、大学で講義を受けるに当たって必要なスキルを身につけることがこの授業の目標であり、授業評価アンケートにも学生からの要望として、「授業が始まる前に教えておいてもらいたかった」といった感想が見られたため、2016年度からは、30コマのうち、最初の12コマ分を入学式翌日からの3日間で行うことにした（表1）。この3日間で大学の様々な施設（図書館、情報処理演習室等）の利用法やノートテイクといった必要最低限のスタディスキルを学修する。そしてその後通常授業が開講されるというスケジュールになっている。こうした日程を可能にするために授業の開始時期に関する全学的な協力も不可欠である。本稿ではこの3日間の取り組みと、この授業で取り入れているPBL（Problem Based Learning）を中心に報告し、授業内で用いているいくつかのツールの紹介を行う。

もちろん、最初の3日間の授業のみでノートテイクなどがすぐにできるようになるわけではないので、時間をかける必要があるスキルについては、それ以降の授業内でも繰り返しトレーニングを行っている。またこの授業はチーム医療教育の基盤を作るための授業でもあるので、3学部混成の6人~7人のグループを60グループ作り、授業内でペアワークやグループディス

表1. 2016アカデミックリテラシー日程

回	月/日	時限	テーマ	グループ	受講場所
1	4/6(水)	1時限	イントロダクション：大学で学ぶ意味	全グループ	オクタホール
2		2時限	医療人としてのマナー	全グループ	オクタホール
3		3時限	① チームビルディング ② 情報リテラシー	①31~60 ② 1~15 ②16~30	レストラン1階 情報処理演習室2 情報処理演習室3
4		4時限		① 1~30 ②31~45 ②46~60	レストラン1階 情報処理演習室2 情報処理演習室3
5	4/7(木)	1時限	① 図書館利用のルールと実践 ② ネットのマナーと情報検索	① 1~30 ②31~45 ②46~60	M201/図書館 情報処理演習室2 情報処理演習室3
6		2時限		①31~60 ② 1~15 ②16~30	M201/図書館 情報処理演習室2 情報処理演習室3
7		3時限	① ノートテイキング ② Wordの使用法(1)	①1~30 ②31~45 ②46~60	M112 情報処理演習室2 情報処理演習室3
8		4時限		①31~60 ② 1~15 ②16~30	M112 情報処理演習室2 情報処理演習室3
9	4/8(金)	1時限	① レポートを書く(1) ② Wordの使用法(2) ③ レポートを書く(2)	① 1~20 ②21~30 ②31~40 ①41~60	M203 情報処理演習室2 情報処理演習室3 M204
10		2時限		①21~40 ②41~50 ②51~60 ③ 1~20	M203 情報処理演習室2 情報処理演習室3 M204
11		3時限		③41~60 ② 1~10 ②11~20 ③21~40	M203 情報処理演習室2 情報処理演習室3 M204
12		4時限		講演「薬物乱用 タバコ、お酒から危険ドラッグまで—断ち切れない連鎖—」(仮)	全グループ
13	4/15(金)	3時限	講演「性感染症について」	全グループ	オクタホール
14		4時限	レポートを書く(3)	全グループ	オクタホール
15	4/29(金)	3時限	① PowerPointの使用法 ② クリティカル・リーディング	① 1~30 ②31~45 ②46~60	M201 情報処理演習室2 情報処理演習室3
16		4時限		①31~60 ② 1~15 ②16~30	M201 情報処理演習室2 情報処理演習室3
17	5/13(金)	3時限	レポートを書く(4)	全グループ	オクタホール
18		4時限	PBLとプレゼンテーション	全グループ	オクタホール
19	5/27(金)	4時限	中間試験	全グループ	※試験会場は別途指示します
20	6/3(金)	3時限	PBL(1)-1	1~30	※M棟、G棟カンファレンス ※各グループの場所は別紙を 参照してください。
21		4時限			
22	6/10(金)	3時限	PBL(1)-2	1~30	※M棟、G棟カンファレンス ※各グループの場所は別紙を 参照してください。
23		4時限			
20	6/17(金)	3時限	PBL(1)-1	31~60	※M棟、G棟カンファレンス ※各グループの場所は別紙を 参照してください。
21		4時限			
22	6/24(金)	3時限	PBL(1)-2	31~60	※M棟、G棟カンファレンス ※各グループの場所は別紙を 参照してください。
23		4時限			
24	7/1(金)	3時限	PBL(2)-1	全グループ	※M棟、G棟カンファレンス、 図書館グループ学習室 ※各グループの場所は別紙を 参照してください。
25		4時限			
26	7/8(金)	3時限	PBL(2)-2	全グループ	※M棟、G棟カンファレンス、 図書館グループ学習室 ※各グループの場所は別紙を 参照してください。
27		4時限			
28	7/15(金)	3時限	PBL(2)-発表会	全グループ	※会場は別途指示します
29		4時限			
30	7/22(金)	3時限	まとめ	全グループ	オクタホール

カッションなどでもできるだけたくさん取り入れるようにしている。

4月、5月の間は基本的なスタディスキルと情報リテラシーの学修を行っている。この期間は60グループを半分に分けて、30グループは情報処理演習室で情報検索の方法、Word、PowerPointの使用法を学び、残りの30グループはノートテイク、クリティカルシンキング、文章表現、レポート作成などを学修している。この授業は3、4限連続の授業なので、3限目に情報処理演習室で授業を受けたグループは4限目はスタディスキルを、逆に3限目にスタディスキルに関する授業を受けたグループは4限目に情報処理演習室で授業を受けるといった形態をとっている。情報処理演習室の授業はPC台数の制約から、30グループをさらに15グループずつ、2つの演習室に分けて授業を実施している。スタディスキルズに関する授業も、使用できる教室の関係で2つの教室に分かれることもある。6月以降はPBL形式のグループ学習を行う。このPBLでは4月、5月で学んだ情報検索、クリティカルシンキング、ソフトウェアの活用などのスキルを総合的に使い、グループディスカッションを通して、シナリオについての理解を深めていく。本稿冒頭で述べたが、この6月、7月のPBLについては3学部教員にチューターとして授業に協力していただいている。

V 授業内容

表1に一覧があるが、授業の詳細は次のような内容となっている。初日の1限目には受講生全員を対象とした授業のガイダンスを行っている。またこの時間の後半は自らがこの大学に入った目標と、それを達成するために必要なことをマインドマップで描き出して明確にする作業を行っている。2限目も引き続き受講生全体で授業を受けている。この時間はキャリアデザインセンターの職員に講師役を務めてもらい、医療人にとって必要な挨拶やマナーに関する話やコミュニケーションをとるときにどのようなことに気をつけるべきかといったことをペアワークなどで体験し、学生自身が実感しながら理解できるように説明してもらっている。

3、4限目は入れ替え制で60グループをふたつに分け、30グループはレストランで、チームビルディングを行いグループ内の緊張を解かし、今後のグループワークがスムーズに行えるようにしている。他方の30グループは情報処理演習室で本学の情報システム

に関する説明を受けた後、大学が支給しているメールアドレスの設定や、自らのスマートフォンでそのメールを受け取ったり、場合によって別のメールアドレスへと転送するための設定などを学んでいる。

二日目は最初からグループを2つに分け、一方は図書館ツアー、他方は情報処理演習室での授業となっている。図書館ツアーは人数の関係からさらに2つのグループに分かれ、図書館職員による館内ツアーで書架の説明、本の貸し出しやコピー機の使い方、図書館に併設されているグループ学習室の利用法などを学ぶ。もう一方のグループは図書館に隣接する情報処理演習室で図書の検索方法、検索画面の見方などを学び、実際に図書館職員から与えられたテーマにしたがってPCで図書の検索などを行ったり、グループで話し合いながら情報検索を行っている。前日と同じように、2限目はそれぞれ入れ替わりで図書館ツアーと情報処理演習室での授業を受ける。

この授業では教員のみならず、キャリアデザインセンターの職員、図書館職員にも授業の一部を担当していただいている。というのも、学生がこの先大学生活においてたびたび活用する、あるいはしなければならない場所であり、早期にそうした部署の存在になじんでももらいたいと思っているからである。

二日目の午後からは、情報処理演習室で情報リテラシーと講義室でのスタディスキルに関する授業が行われている。情報リテラシーの授業では、タイピングの練習から行っている。実際、入学生のPCに関するスキルには大きな開きがあり、比較的スムーズにキーボードを打てる学生もいれば、必ずしもそうではない学生—たとえば大文字の打ち方がわからないといったような学生やPCよりもスマートフォンのタッチパネル上でのフリック入力のようになじみのある学生—も存在するので、様々なソフトウェアを使うより前に、PCの基本的な操作になじんでいく必要がある。

スタディスキルについては、まずはノートテイクのスキルを身につけるところからは始めている。必ずしも全員が同じようなノートを作る必要はないが、ノートをとることの意味を説明し、ノートテイクに必要ないくつかのスキル、考え方を示した上で、短い動画などを活用しながら実際にノートテイクを行い、グループ内で自分のとったノートをもとに、そのテーマについて説明させたりしている。

ノートテイクというスキルはいちどの説明だけですぐに身につくようになるわけではないので、本科目では、スタディスキルズに関する授業の最初10分～15

分を毎回ノートテイク用のミニ講義の時間としている。そこでは共通教育センターの教員が自分の専門分野に関する（たとえば天文学、化学、英語など）講義を行い、その講義内容に関する質疑応答などを通して、講義の重要なポイントがノートできていたかどうかを確認するという取り組みを行っている。また、毎回ではないが、学生がとったノートを回収して、教員がうまくとれていると評価したノートを1つの見本として学生に提示し、自分自身のノートの取り方と比較することで、自分にとってよりよいノートをとるためにどのような工夫をすればよいのかを考えさせたりしている。そうした中で、自らのノートテイクのスキルが徐々に上がっていくことを実感している学生もいる。ノートをとるという習慣は、大学生にとって必要な習慣であることはいうまでもないが、本学の学生は、医療職を目指す学生でもあり、実習や働き始めてからも必要なスキルであるので、継続的にこうした時間を設けている。

三日目も引き続き2グループに分かれて情報リテラシーとスタディスキルズの授業を並行して行っている。情報リテラシーに関しては、Wordの利用法を指

導している。スタディスキルズの授業では、学術的な文章の読解や、そうした文章の作成法、レポートの書き方についての授業を行っている。そしてこの三日間の締めくくりとして、最後の時間では、薬物乱用に関する講演会を薬学研究者でもある学長に行っていた。この講演では、これまでの授業で説明し、自ら体験してきたノートテイクのスキルを活かしてノートを取り、そしてレポート作成について簡単な説明を授業で一通り受けているので、その講演に関するレポート作成を宿題として課している。レポートはWordで作成し、本学で運用されているmoodleを経由して提出させることで、情報リテラシーの授業で実施されている内容と、スタディスキルズで実施されている内容とがひとつになって、大学での学びが行われていくことに気づいてほしいと考えている。

提出したレポートは次の授業時にプリントアウトしたものを持参させ、そこで教員からもう一度レポート作成に関する基本的なルール（書式、引用や注のつけかた、文献の記載方法など）を説明した上で、レポート評価用のルーブリック（表2）を学生に配布し、グループ内でレポートを交換してルーブリックに従っ

表2. レポート評価用ルーブリック

		グループ番号	学籍番号	氏名
評価項目	尺度	尺度3(2点)	尺度2(1点)	尺度1(0点)
提出期限		提出期限までにmoodle(HUHS CMS2016)に提出し、授業のためにプリントアウトしたものをもってきた。	提出期限までにmoodleには提出できなかったが、授業にはプリントアウトをもってきた。(moodleに提出したが、プリントアウトを授業にもってこなかった。)	まだmoodleに提出していないし、授業にプリントアウトしたものも持ってきていない。
レポートの形式		タイトルをつけており、字数も800字程度は書かれている。また参考資料を3つ以上用いていて、出典もレポートに記載している。	タイトルをつける、字数800字程度書く、参考資料3点以上つけるのいずれかを満たしていない。	タイトルがついておらず、文字数も800字以下であり、参考資料も2点以下しか使っていない。
日本語のルール		書き言葉で書かれており、適切に改行がなされている。改行後は1文字下げで文章が始まっている。誤字や脱字がない。全体として読みやすい文章である。	誤字脱字が2つ以内であり、全体としては読みやすく、話し言葉は使われてはいない。適切に改行が行われているが、改行後に1文字下げしていない。	<ul style="list-style-type: none"> 話し言葉が使われている。 誤字脱字が3つ以上ある。 改行がまったくなされていない。 改行しても、改行後は1文字下げしていない。 以上の項目のうち二つ以上当てはまる。
文章構造		問題提起、考察、結論の三つの部分がそろっており、何を問題とし、どのような考察が行われて、それにもとづいてどのような結論が導かれているかが明らかである。	問題提起、考察、結論の三つの部分がそれほど明確ではないが、何を問題としているか、あるいはどのような結論が導かれているかはわかる。	問題提起、考察、結論の三つの部分がまったく明確ではなく、何を問題として、どのような結論が導かれているのかよくわからない。
引用・参照		引用文は適切に「」でくくられ、このレポートの著者の文章とは異なることが明らかになっている。	「」は使っていないが、このレポートの著者の意見と引用文献、参照文献からの意見(文章)とが区別できるようになっている。	どこからどこまでが引用で、どこからどこまでが著者の文章なのかわからない。あるいは引用文献、参考文献などはまったく使っていない。
合計点		/10		

評価点 尺度3=2点、尺度2=1点、尺度1=0点

て採点し、コメントをつけさせている。その上で、レポート作成の説明、レポート評価用ルーブリックを参考にしながら、自分の書いたレポートをもう一度書き直すことを宿題として課し、翌週までにふたたびmoodleに提出させている。

4月中旬から5月にかけては隔週2コマ（金曜日3、4時限）で授業を進行している。それまでと同じように3、4時限でグループを入れ替えて、情報リテラシーの授業では、引き続きWordの使用法や、PowerPointの基本的な使い方を学修している。スタディスキルの授業では、クリティカルシンキングや、クリティカルリーディングといった、情報のふり分けや、思考力の涵養に努めている。

三日間集中の最後の時間と、この4月から5月にかけての隔週の授業日の期間はシャトルカード（表3）をもちいて、その日の授業の重要ポイント、授業でわかりにくかったこと、授業の感想などを記載させている。このシャトルカードは回収後、共通教育センター教員が一人あたり40人程度の学生のカードを分担して目を通し、コメントをつけて次の授業時に返却するようにしている。そしてコメントをつけながら学生が記載している疑問点などを紀平まで知らせてもらい、全員への回答が必要と判断した疑問については、次の授業の冒頭に口頭で回答するようにしている。シャトルカードを使うことで、学生の疑問に素早く対応できることと、また学生自身も学修内容を理解し、自ら何ができるようになってきているか、あるいは何ができないままなのかということを確認し、振り返りの習慣をつけるための助けになると思われる。

6月に入るとこのアカデミックリテラシーの授業が開講されている金曜日に、一年生が兵庫医科大学病院へ早期臨床体験実習（ECE）にでかけることになる。病院の受け入れの関係から、いちどに一年生が全員実習できるわけではないので、アカデミックリテラシーで作成した60グループの内、30グループずつが2回の金曜日を利用してECEへとでかける。つまり、前半の2回の金曜日に30グループがECEを行い、残りの30グループは大学でPBLを行う。後半の2回の金曜はその逆になる。

これまでPBLに関してはシナリオに医療問題を取り上げていたが、2016年度は必ずしも医療問題ではないシナリオを学生に渡した（前半のPBLでは、血液型占いの科学性に関するもの、後半のPBLでは忘れ物の取扱に関するもの）。本授業科目でPBLを行う理由は、これまで学んできた情報リテラシー、スタディスキルズを総動員して、シナリオに関する理解を深め、グループでディスカッションしながら自分たちで設定した問題を解決していくためである。しかし、医学的なシナリオを与えた場合、学生はまだ十分な医学的知識もなく、また臨床の場面を想像することも難しい。そうした中で与えられたシナリオは学生にとっては、何か唯一の正解のある問題のように見えてしまい、議論し、様々な意見を交わすよりも、シナリオを読み解くために図書館やインターネットで資料を検索し、正解らしい情報を見つけることに専念してしまう傾向が実際に過去には見られた。それでは多様な意見に耳を傾けながら、グループ全体でディスカッションを行い合意形成するという本科目の到達目標のひとつを学

表3. シャトルカード

		グループ番号	学籍番号	氏名	
授業日	授業内容	わかったこと	わかりにくかったこと、疑問	感想	教員欄
4月8日 ※6日から8日までの3日間について書いてください。					
4月15日					
4月29日					
5月13日					

生が十分満たすことは難しく思われた。そこで、2016年度からは必ずしも医療問題にテーマを限定することなく、むしろ学生が多様な意見を出すことが可能なシナリオを与えることを念頭においている。こうしたことは、IPEのコンピテンシーとしてあげられていた「コミュニケーション」、「学習と批判的考察」といったコンピテンシーを涵養することにもつながる。また各週の最後の時間にその日のグループディスカッションをグループ全員で振り返り、振り返り表に記載させるようにしている。

7月に入りECEが終了すると、アカデミックリテラ

シーとしては最後のPBLのクールとなる。6月はPBLの学修方法に慣れることを目的として、比較的取り組みやすいテーマを選択したが、7月のPBLのシナリオは医療問題を用いた。今年度は常見が中心となり、チーム医療教育支援部門員や兵庫医科大学の医師の意見も取り入れて作成したHIV/AIDSに関するシナリオを用いた。このクールのPBLでは3週目にグループディスカッションの成果を発表することにしている。このPBLでのグループ学習、発表についてはループリック(表4、5、6)を作成し、各グループを受け持っている担当教員によってループリックを用いた評価を

表4. PBL評価ループリック：グループ評価

グループ番号

7月1日

	よくできた(5点)	普通(3点)	できなかった(0点)
チームワーク	自分たちがすべき事柄をメンバー全員で共有し、それぞれに与えられた役割を果たすことができた。	何をすべきか、全員がわかっているわけではなく、一部の人が作業をしていた。	積極的にグループをまとめることもなく、何をすべきかの共通理解も得られなかった。
自己主導型学習	シナリオから問題を見いだして、いくつも(7個以上)の学習課題を挙げることができた。	シナリオから問題を見いだして、いくつも(1から6個)の学習課題を挙げることができた。	シナリオから問題を見いだして、学習課題を挙げるができなかった。
ディスカッション	全員が活発に発言することができた。司会は様々な意見に配慮しながらディスカッションを進行することができた。書記は発言を的確に記録することができた。	司会は全員が発言するように配慮していたが、活発に発言する人とそうでない人がいた。書記はそれぞれの発言を記録することができていた。	まったく発言しない人がいたし、司会も特に発言を促さなかった。
授業への取り組み	全員積極的にディスカッションに加わり、協力して学習しようとしていた。	全員ディスカッションに加わってはいなかったが、時々スマホなどをみて集中していない人がいた。	まったくディスカッションに加わらない人がいた。ほかのメンバーも積極的にその人に授業に参加するように促さなかった。

グループに対する教員コメント

点

表5. PBL評価ループリック：グループ評価

グループ番号

7月8日

	よくできた(5点)	普通(3点)	できなかった(0点)
チームワーク	自分たちがすべき事柄をメンバー全員で共有し、それぞれに与えられた役割を果たすことができた。	何をすべきか、全員がわかっているわけではなく、一部の人が作業をしていた。	積極的にグループをまとめることもなく、何をすべきかの共通理解も得られなかった。
自己主導型学習	先週見つけた学習課題の1つ1つをすべてについて議論した上で、発表用に重要課題に絞り込むことができた。	先週見つけた学習課題のうち、複数の課題について議論した上で、発表用に重要課題に絞り込むことができた。	先週見つけた学習課題のうち、発表用のテーマを決めてから、議論を行った。
ディスカッション	全員が活発に発言することができた。司会は様々な意見に配慮しながらディスカッションを進行することができた。書記は発言を的確に記録することができた。	司会は全員が発言するように配慮していたが、活発に発言する人とそうでない人がいた。書記はそれぞれの発言を記録することができていた。	まったく発言しない人がいたし、司会も特に発言を促さなかった。
授業への取り組み	全員積極的にディスカッションに加わり、協力して学習しようとしていた。	全員ディスカッションに加わってはいなかったが、時々スマホなどをみて集中していない人がいた。	まったくディスカッションに加わらない人がいた。ほかのメンバーも積極的にその人に授業に参加するように促さなかった。
発表準備	役割分担を決めて、全員が発表資料作りに積極的に関わっていた。	全員が資料作りに関わったが、関わり方にメンバー内で差があった。	発表資料作りを他のメンバーに任せきりの人がいた。

グループに対する教員コメント

点

行っている。

一連の授業を終えた後、グループメンバーによるピア評価を行っている。ピア評価（表7）はmoodleからグループメンバーの名前が入ったファイルをダウンロードし、自分以外のメンバーに対して順位づけを行い、それぞれのメンバーに対するコメントを記入した後、そのファイルをmoodleにアップロードして提出する

という方式をとっている。アップロードされたファイルは提出期限終了後、紀平がダウンロードし、集計を行い成績に反映させている。前年度まではピア評価は持ち点をメンバーに配分する形式で行っていたが、その方法だと、全員に対して同じ点数を割り振る場合や、仲のよさそうな人に大半の点数を割り振るなどということが見られたので、2016年度は順位づけに変更した。

表6. 発表評価ルーブリック

グループ番号

	2点	1点	0点
発表と資料	発表では原稿を見ずに聞き取りやすく話すことができた。資料も見やすくわかりやすいものであった。	発表では原稿を見ずに話すことができ、聞き取りやすかった。あるいは資料は見やすかった。	発表は原稿を読み上げた。そして資料も見にくかった。
発表時間	おおむね5分以内(4分30秒～5分)で発表できた。	発表時間が5分より短かった、あるいは長かった(4分～4分30秒 or 5分～6分)。	発表時間が短すぎた、あるいは長すぎた(4分未満 or 6分以上)。
質疑	発表テーマについてはもちろん、発表テーマ以外の質問があった場合もしっかり答えることができた。メンバー全員が積極的に質問に回答しようとしていた。	発表テーマについては質問に答えられたが、発表テーマ以外については回答できなかった。質問への対応を一人に押しつけ気味だった。	発表テーマについても、テーマ以外についても回答できなかった。
情報	使われている情報は信頼できるものであった。また出典なども記載されていた。	使われている情報は必ずしも信頼できるものではなかった。あるいは出典が記載されていなかった。	使われている情報が信頼できず、また出典も不明だった。
発表テーマ	発表テーマがよく絞り込めていて、何を問題としているのか明確だった。そしてその問題に対する回答も導き出せていた。	発表テーマはよく絞り込めていたが、問題に対する回答が明確ではなかった。もしくはテーマそのものが曖昧だった。	テーマが曖昧で、けっきょく何を問題としているのかわからなかった。

点

表7. ピア評価

以下の観点を参考にして、自分以外のメンバーが、チームに対してどのように貢献したか評価してください

1. 準備：準備してグループワークに臨んだかどうか
2. 貢献：グループのディスカッションや課題に積極的に貢献したかどうか
3. 他者の意見の尊重：他のメンバーに意見を求め、それを尊重したかどうか
4. 柔軟性：メンバー内で意見の不一致などが起きたとき、柔軟に対応したかどうか

▷ チームのために一生懸命がんばった人を高く評価し、それほどではなかった人に低い評価を与えるのは公正な事です。真剣に考え、正直に書いてください。

▷ 評価は、言葉によるフィードバックと、数値による評価(貢献度)から成ります。

▷ 数値による評価(貢献度)は1位から6位(7人の場合は7位)まで順位をつけてください。

▷ 言葉によるフィードバックも、順位による評価(貢献度)も、**両方必ず記入**すること。

▷ **自分の欄には**、何も記入しないでください。

▷ 一度も出席していないメンバーは空欄にしてください。

メンバーの学籍番号・名前	その人は、どんな点でチームに貢献しましたか?	その人は、どんな点を改善すればよいと思いますか?	貢献度の順位

グループ番号	あなたの名前

記入したら、moodleで提出してください。

VI 今後の課題

最後にアカデミックリテラシーの実施に関するいくつかの課題を挙げて本稿を閉じることにする。

このアカデミックリテラシーでは、一年生全員が同じ内容の授業を履修することになるが、情報リテラシーについても、スタディスキルズについても、その習熟度は必ずしも一様ではない。パソコンの使い方について高校時代にすでに深く学んでいたりする場合もあるが、他方でほとんど習熟していないような学生も見受けられる。スタディスキルズについても同様である。この授業の目的は、「大学での授業の受け方を学ぶ」ということであり、かなり基本的なスキルの習得に内容を絞っている。そのことによって、興味を失う学生が出てくる可能性を否定することはできないだろう。本授業の目的を学生に理解してもらいながら基本的な態度・スキルの修得とともに、授業に飽きさせない工夫が必要である。

またこの授業は情報リテラシーやスタディスキルズを学ぶ授業であり、単独で成立する授業ではない。むしろ本科目で身につけた様々なスキルを他の授業で活かしていくことが必要であり、他の授業との連携も視野に入れながら、授業を作っていく必要がある。そのためには、共通教育センターのみならず、本学の3学部と連携をさらに深めながら、二年先、三年先の、あるいは卒業後のことも考えながら授業の運営を行っていく必要がある。

また本科目が多職種連携教育の中の初年次教育である以上、やはりIPEで提示されているコアコンピテンシーを意識したカリキュラム作りが必要である。そして初年次から卒業年次までの間で、どの段階でどのようなコンピテンシーを修得させていくのかということの本学のチーム医療教育全体の中で考えていく必要があるだろう。

引用文献

- 1) 厚生労働省. チーム医療の推進について, 2010, 16p.
<http://www.mhlw.go.jp/shingi12010/03/dl/50319-9a.pdf>
(参照2017-10-30)
- 2) WHO. *Framework for Action on Interprofessional Education & Collaborative Practice 2010*, 64 p. http://apps.who.int/iris/bitstream/10665/70185/1/WHO_HRN_HPN_10.3_eng.pdf?ua=1 (cited 2017-8-1)

本報告は、JSPS科研費(16K08896)の助成を受けたものです。